



TITLE:

(随想)サラリーマンドクターのたのしみ

AUTHOR(S):

片村, 永樹

CITATION:

片村, 永樹. (随想)サラリーマンドクターのたのしみ. 泌尿器科紀要
1963, 9(3): 115-116

ISSUE DATE:

1963-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112418>

RIGHT:

〔泌尿紀要 9 巻 3 号〕
昭和38年 3 月

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 巻 第 3 号

昭和 38 年 3 月

随 想

サラリーマン ドクターのたのしみ

済生会大阪府中津病院泌尿器科医長 片 村 永 樹

11年間お世話になつた大学をあとに、本年早々から大阪の病院へ赴任した。1962年の御用納めの日が偶然わたくしの診察日であつたので、大学における最後の患者をみおわつて、いままでも協力をおしめなかつた同僚の諸君やレントゲン技官、看護婦さんたちに感謝の心で握手をもとめたが、年がいもなく涙をこぼしてしまつた。ああなんと大学はすばらしいところなんだ。

わたくしのおもむいた病院は北大阪にあるベット数 400 程の中病院だが、交通は国、私鉄、地下鉄、トロバスをはじめすべてに便利がよく、ちかくに泌尿器科の開設されている病院はなく、この病院の影響をうける人口は約50万をかぞえる。すでに30年前からいわゆる皮膚泌尿器科として皮膚科の人が診療をうけもつておられたが、ここ 4～5 年は泌尿器関係の診療はほとんどやつていない。しかし泌尿器科患者がふえるとともに、1 年前から教室のわかい先生方が出張して診療にあたり、いよいよ今年から皮膚泌尿器科をわけて泌尿器科が独立したわけである。わたくしは卒業以来大学をでたことがなかつたから、一般の総合病院にでて、すべてのことにとまどつた。いままでの常識はここでは一切通用せず、一方ここでの常識は泌尿器科の専門医を自負するわたくしには、単なる非常識としかうけとれない。

ここは国公立の税金や、いわゆる一般会計と関係のあるところではないから、泌尿器科の新設といったつていまのようにやすい医療費のなかでは一文の新設予算もないことは、きてからようやくわかつた。ああもしたい、こうもしたいとえがいた夢は、これだけよりしかない 2 本の1922年製膀胱鏡とヤングの生検鉗子の前にもろくもついえさつた。膀胱鏡だけの泌尿器科の時代はすぎさつたこと、このはげしい技術革新の時代に、泌尿器科はわかい診療科目の代表としていろんな器械と検査をもちいて、確実な診断といろんな適応にしたがうのが生命で、なんでもそこにあるからきる、うたがわしいからひらくという旧時代的なやり方とは異質なものであるということが、わたくしたちの常識であつた。しかし、聴診器と心電計とレントゲンとクスリと、それにみずからの腕とだけで月に何百万円もかせぎだしているなかでは、泌尿器科の診察と治療には最少限レントゲンつきの検査台や、TUR の電気手術器がいるんだといつてみても、てんでとおらない。それは理想主義というものですよと一笑にふされてしまつた。無知と無理解と無責任と腹をたててもはじまらない、税金の援助をうける官公立のお役所病院と、やすい医療費のうえに税金をおさめる民間病院、わかい泌尿器科とふい診療科、それぞれで常識は非常識に、非常識が常識にいかわつている。

はじめて5万円也の月給をもらつてみて、サラリーマンドクター、ことに泌尿器科の専門勤務医はいかにあるべきかをかんがえてみた。まず第1、泌尿器科という診療科はどこの病院にでもできるものではないし、あつてはならないようにおもう。今日の泌尿器科はこまかな技術とゆきとどいた心でおこなわれる治療における芸術であり、スキルそのものであるといつてさしつかえない。あるからきるんだ、とりさえすればいいんだというものではない。そのためには、そのようなアトリエと器械と道具と優秀なやる気のあるスタッフが必要である。とすると金がかかるから、泌尿器科のある病院は一流中の一流という保証つきみたいなもので、そのような設備投資のできないところでは、背のびをして泌尿器科などつくるべきではない。

もう一つ泌尿器科は各科と密接な協力が必要であるが、このことはうらをかえせば、おもしろい泌尿器科のケースのおおいところは、その病院の内科や小児科やほかの科の実力がたかいという証拠になる。この点からも、ちやちな病院では泌尿器科はできない。

泌尿器科をどこの病院にでもつくれる3つ目の理由には、その病院を利用する人口が問題になろう。京都は人口100万ちよつとであるが、2つの大学の泌尿器科と国立病院のそれだけで、本当はもう1つ独立した専門医のいる病院がほしいのだが、いまは一応まかなわれている。大雪にみまわれた但馬の兵庫県豊岡病院の後背地は20~25万だが、ちかくに病院がないこともあいまつていろんなケースがあつまつたが、鳥取あたりになると、せまい町にドングリがせくらべして、いいケースがなく、ついいやになつてしまう。したがつて患者があるためにはすくなくとも30万~50万の人口が必要で、そこで充分な設備の病院1つでよいということになる。最近は交通が便利になつてきているし、入院の設備さえととのえれば、少々の距離は問題にならない。だから、充分の設備のできないところへは、スクリーニングの意味でvisiting urologist の形でいけばよい。

地方の一般病院と大学の関係から、大学病院についても一考してよいだろう。大学の性格がいろいろかわつてきたことと、大学でながいトレーニングをうけた医師が地方へ赴任したという事情もあつて、大学病院と一般病院のあり方が非常に、にかよつたものとなつたようにおもわれる。事実、学会の演題ことに地方会のそれになると、大学の仕事も病院の仕事も一向かわらない。やつぱり大学は研究という仕事、つまりあたらしい事実の発見と創造につとめるべきであつて、マンネリの仕事をしていては学問の進歩はない。そのためには、大学が小手術に時間をつぶし、おしよせる外来で精力を消耗することはない。それらは一般病院の泌尿器科にまかせ、そこでできないこととか研究のテーマにしたがつて患者をみるというプログラムがほしいのである。

とするとわたくしたち勤務医は、おおいにサラリーマン意識に徹底したいとおもう。むづかしいことや研究は大学の先生方にまかせ、患者の診療とお金もうけに力をそそぎたい。学問の進歩というようなことには、わたくしたちサラリーマンドクターの肩の上にはないが、患者によくなつてもらつて余命をまつとうしてもらふ責任はある。このことに徹底していきたい。だからおおいに時間をつくり、一生懸命患者をみたあとにはマージャンをやり、時にはジャーナルもよみましょう。そのかわり、大学の先生方は、一生懸命本をよみ研究をし、そのあいまに患者をみ、野球をやり、ユメ、マージャンにうつつをぬかすなかれ。というのがサラリーマン1年生で膀胱鏡しかない泌尿器科医のいつわらぬ心境だが、世のサラリーマンドクターのみなさん、わたくしたちは、ほかのむづかしいことにわずらわされず、患者をみることをたのしみ、芸術的なレントゲン写真をとることをたのしみ、スキルフルな手術をたのしみ、おおいにわがサラリーマン生活をおう歌しようではありませんか。